

人間を育てる

、A子との十一年間、

津守 真

六年生のA子が二階から階段をおりてくるところに出会った。両腕にあき缶をいくつもかかえている。緑色のお茶の缶、褐色の烏龍茶の缶、ムーミンの絵のついたドロップの缶など、A子を選んだ好きな缶である。しっかりした自信のある足どりでホールの方に歩いてゆく。チラと私を見てゆくのだが、表情が豊かで可愛い。ごく小さいときに脳の手術を受けたこの子は、心で笑っていても、顔に表すことができなかった。それを私共はもどかしくまたあわれに思った。いまは心の喜びや自信が、丸くふくよかな顔の全面に溢れ出ている、だれでもこの子が笑っていることを疑わないだろう。

A子は自分がきめたソファアの上や、テーブルの前に腰をすえると、缶を置いて、クレヨンやマジックで缶に線をかいたり、自分の爪を赤く塗ったりする。大人が通りかかると、ア、ア、と呼んで歌をうたわせる。その大人によって歌の種類が違うから、A子にはその人ごとに、曲のみでなくその人との感觸の違いをたのしんでいるのだらう。実習生をふくめて学校中の大人たちのほとんど全員が、A子に呼ばれてそれぞれの歌をうたう経験をしている。そういうときに、A子はびったりと顔を寄せて、全身で親しみを寄せてくる。

先日はトランポリンの上でいくつも小さなボールをいじりながらひとりで揺られていたとき、幼稚部の子どもが傍に乗った。そしてA子の両足の間のボールをひとつ取った。私はA子が怒るかと思っていたら、自分が持っていたボールをもうひとつその子に差し出したのである。小さなことであるが、それはA子には全身から溢れ出る好意のように思えた。こういうことが一日の生活の片隅にいくつもある。ひるのお弁当は、自分のクラスのテーブルで食べるのだが、そのときに、同じ六年生の格好の良い男の子の傍に弁当をもってゆくのだという。A子の中にいつのまにか育っている、異性の他者への関心に私はおどろかされた。

ときどき、一日だけの実習生がA子とつきあったとき、六年生なのにこんなことしかできないのですか、もうじき中学にゆくのにこれでもいいのですかと言われることがあります。第三者が、能力だけの視点からみたときには、そういう評価になるのかもしれない

し、もっと教育的観点からなすべきことがいろいろあるのに、と思われるのだろう。私はそういう見学者や実習生をみていると、最初の三十分程はA子はその人のことを相手にしていない。話しかけられても見向きもしないで、缶やマジックをいじっている。そのうち、一日一緒にいてくれる人と思うと、自分からその人の手を引いて、部屋から部屋へと学校中を歩きまわる。その人にとっては、ただぶらぶらと歩いているように思えるかもしれない。しかし、A子ははじめてのお客様を案内して、わたしはこういうところで毎日生活しているのですよと見せて回っているように私には見える。見学者や実習生は、一日だけのつきあいなのに、この子を指導しようと思ってみている。しかし、A子は幼児のときから十一年間この学校にいていろいろの時期を過ごしている。A子の方がこの学校の主人で、はじめて来られた方はお客様である。私はA子が客を案内しようという配慮をしているのを見て感心するのである。これは目に見える能力とは違って、長年の間、毎日人とのかわりの中で育てられる人間性であると思う。

丁度この日、心障学級の卒業生を自分の会社で雇っておられる方から話を聞く機会があった。その子は日常の会話もできるし、読み書きもできる。しかし、数人しか社員のいない会社で、この子をいれてやってゆくには、なかなかの苦労があるという。朝から機嫌が悪いことがしばしばである。そういうときには周囲も重苦しくなり、それをなだめながら仕事を進めてゆくには、皆のひとり方ならぬ努力がいる。また、人を自分よ

り上か下かで判定して見る。大学を出たばかりの今年入社した人は下で、給料を配る人は上である。だから新入社員は苦勞している。この子が都立の養護学校の高等部を出てこの会社に就職してから三年間は、学校の先生が年に二、三度、見に来られた。先生がこられると、この子はいつもとは違ったいい子になる。先生は、この子が欠勤せずうまくつづけているかどうかを見回りに来られるのであって、こちら側の毎日の苦勞には関心がないようだ、その方は苦笑された。学校を卒業して後も、人間教育はつづけられるのであるし、学校に在る間にそれははじめられ、その基礎はつくられるのであることを私はあらためて考えさせられた。

A子が私の学校に来たのは二歳になる前だった。丁度私が大学を辞めて、現在の学校で保育に専念するようになった年のことである。そして今年十二歳だから、丁度私がこの保育の現場で毎日を通すようになったのと同じ期間を、この同じ場所で一緒にいたことになる。その間、幼稚部の年長と、一年生、二年生と三年間は、私はA子のクラスの担任をしたので、ほとんど毎日と一緒に過ごした。クラス担任をするということは、その子を守る者は自分以外にいないというような、思い上がった言い方ではあるけれども、それほどに実質的な体験をすることである。それは私にとってどんなに感謝しても尽くせない期間であった。この間にこの子は自分で立ち上がって歩くようになった。また、この間、学校に来てほとんど一日中発作を起こしている期間もあった。そんなと

き、発作を起こしそうになると私の膝にすり寄ってきて危機にある自分の存在の支えを探し求めた。そして発作の間の意識の断絶にもかかわらず、意識を回復した次の瞬間にこの子は手を伸ばして手近にあるボールを掴もうとした。けれどもボールに指先が届く手前でまた発作が始まり、がっくりと身体が崩れるのだった。私は、身体の危機の中にあっても日頃の精神の能動性がはたらいっていることを、そしておそらくそのことが身体の危機の時をも支えていることを感じさせられた。

母親は、A子の発作がつづく日々にも、休まずに学校に連れてきた。私は、どんなときにも「いま」を子どもと一緒に快く過ごすことの大切さを確認しつつ、毎朝この子を受けとることに喜びを感じた。後に、発作がほとんどなくなって、この子がいろいろの活動をはじめて、私共がついもつと多くのことを期待するようになったとき、このときのことを思い起こして心を引きしめた。

最近数年間は、担任もかわり、私とA子とのつきあいもへった。その間にも、小さな学校の中なので、一日のどこかで顔を合わせ、親しみを交す。小さいときにかかわった子どもには、大きくなっても特別の親しさを感じるのは当然であろう。しかし、小さいときのことを知らなければかわれないわけではない。むしろ、過去につきあいがあっても、いまのつきあいは別である。大きくなったときのその子どもと、そのときの必要にこたえてかかわるのが保育である。その際、そのときの能力や活動だけに目を奪われ

ないようにして、互いに心の深いところで人間が育つようにかかわる。つまり、この点では、幼い子どもの保育も、大人になったときのかかわりも、共通なのだと思う。

この子どもたちとの十一年間の交わりの中で、私も人間として育てられてきたのだと思う。

A子は今年の三月に小学校を卒業して私共の手もとはなれる。

(愛育養護学校)

